

## ◆ 第4回 発情徴候の判断に誤りはありませんか？

これまで、牛の繁殖成績を良くするためには、発情徴候を正しく観察する事が大切であると説明して参りました(9月1週号、2週号参照)。今回は「人は時々見落としをする」という事を考えてみましょう。

牛の発情周期は、色々なホルモンが驚異的と思われる程正確に、相互に調節し、卵胞の発育＝発情行動・排卵、黄体形成と機能維持＝妊娠の場合は胎子の着床・発育・分娩・哺乳に、不妊の場合は次の発情へと、多くの牛は生殖行動を規則的に営んでおります。

ここで、ホルモンの素晴らしさをちょっとだけ説明させていただきます。

例えば、黄体ホルモンの濃度は血液や乳汁中で黄体期、あるいは妊娠中には10～20 ng/ml(ドラム缶50本の水の中から、1円硬貨1枚を探すよりも薄い濃度です。エストロジェンは、さらにその1/1000程の濃度です)と大変少ない量ですが、しっかり生殖のための作用を致します。ホルモンの血液中の濃度は大変低い値ですが、掌に乗るネズミから、1ト以上もある牛まで発情周期中の変化は似ております。

今回は、どの程度の割合で発情を誤って判断しているか考えてみましょう。

管理者の方が「A号が発情なので、人工授精をお願いします」と連絡をとったと仮定します(表1-1参照)。

**表1-1 発情徴候を正しく観察してますか？**

区 分	乳汁中黄体ホルモン値	観察頭数	受胎率
牛群管理者の誤った判断	高値	25	0%
乳汁中の黄体ホルモン値	低値	49	61%
合 計	—	74	41%

(Smith,1982)

しかし30%強(25/74頭)の黄体ホルモン値は高く、健康な、あるいは正しい発情の時期ではないことを意味しております。ちょうど、人がピルを服用している状態と同じですから、排卵は起こらず妊娠する事はありません(理由＝黄体ホルモン濃度が高く、発情期の早い時期か排卵が終了した遅い時期、黄体の疾患、あるいは妊娠中の擬発情などが考えられます)。

ホルモン剤の使い過ぎに注意しましょう！